木について
――神学的考察――

小林謙一

Eine theologische Betrachtung über den Baum

Ken'ichi KOBAYASHI

0. まえがき

木は人間に親しいもので（砂漠や氷原の住民はどうかわからないが）ある。木は家や家具，いろいろの道具の材料，また燃料といった実用的な意味をもつ。その場合，鉄やコンリート，プラスチック，灯油などとは違って，木材や薪はどこかわれわれに懐かしさを感じさせる。しかしそれ以上に，われわれは特定の一本の木に人生を感じたり，一族の歴史の象徴を見たりする。また，森や林の中にはいると安らぎをおぼえ，時には恐怖をいだき，畏怖の念にうたれる。そこで，われわれは木にさまざまのイメージを投影し，それは多くの民族の神話，さらに民話・伝説・おとぎ話に結晶している（宗教学的には逆で，木において聖性が人間に啓示されるのであるが)。誰でも木が主役になり，あるいは重要な役割をはたす物語を，いくつも思い出すであろう。ジャックと豆の木，月桂樹に変身したダフネ，花咲か爺，新しいところでは，トトロの森の主の木。また，ヘンゼルとグレーテルを典型とする主にドイツの童話では，森は恐ろしい場所で，明るい日常の世界とははっきり区別されている。中世ヨーロッパでは森は村，すなわち人間の力の下にある小宇宙の外にある，暗く，狼（また人狼）と悪魔の住む，人間の力のおよばない大宇宙の一部であった[1)]。木は，いうまでもなく文学作品でも，（多かれ少なかれ象徴的な）意味を担うことが多い。例えば大江健三郎の場合，木のイメージがコスモロジー的な意味で，すなわち宇宙樹として，しばしば現れる。畑は少し違うが，南方熊楠にも同じような指向があるように思う。「熊楠によれば日本の『神道』は，森の生んだ宗教であり，神々は森の中に坐すものであるという」[2)]。古井由吉，中上健次についても（木というよりむしろ，森，地に対してかもしれない）似たようなことが言えそうに思う。新井素子は，動物だけでなく，植物も人間と同じように生きていると感じる感性が豊かである（『グリーン・レクイエム』『緑幻想』)。木を歌った歌も．洋の東西を問わず，多い。短歌・俳句はもちろん，童謡・唱歌・歌謡曲（ロックやニューミュージックには少ないが，当然であろう)。ドイツでいえば，樅の木，菩提樹。美術の分野でも，ロマン派絵画では木が人間の内的生命と自然・宇宙の生命との照応のシンボルとなり，シュルレアリスムではこれに中世神秘主義の要素が加わり，モンドリアンの木の連作は水平と垂直の宇宙的シンボリズムを表現している，と説明される[3)]。

キリスト教信者にとって，木といえばすぐに思い浮かべるであろうイメージは，詩篇第1篇，「流れのほとりに植えし木の…」であろう。広々とし，乾燥した原を流れる生命の水のほとりにまっすぐに立つ，瑞々しく，緑豊かで，涼しい木陰を提供する一本の高い木。神の前にまっすぐ立つ，心に曇りなく，心豊かで，しかもすなおな，義しき人の譬えである。それは「報いを求める打算的信仰」とは無縁に，「神に服従する信仰」，「信仰のオプティミズム」に立つ「神の意思に従う生活」[4]を表す。「栄えることそのものではなく，どこまでも喜ばしく，揺るぐことのない神の確かさが，この生活の真の内実であり，価値であり，そこへ導くただ一つの道が，信仰における服従なのである」[5]。同じ信仰を歌うのが詩篇92篇である。ここのなつめやし（しゅろかもしれない）とレバノン杉（ヒマラヤ杉？）もarbor virtutumであって，高くそびえ，草と違って萎れることなく，長く栄え，豊かに実を結ぶ。この木も，「神の義に信頼する」義しい人の「生の意味」を示す比喩である[6]。その他，「ヤーウェの若枝」（イザヤ書9章2節），「神の葡萄園」（イザヤ書5章，27章，エレミヤ書32章，）など，また旧新約聖書でしばしば譬えに用いられる葡萄の木，無花果，香柏（レバノン杉）を想い起こす人も多いであろう。

1. 宗教学的に

原始人・古代人は周囲の自然に対して，現代人にはもう想像できない，強い感受性をもっていた。自然界の万物がありありと存在し，生きていた。それらは超自然的で聖なるものと感じられた。現代の自然科学に慣れたわれわれが見るような，単なる物体というものはなかった。すべてのものが神また精霊であった[7]。そこではまた同時に，自分たち人間との近さ・同質性への感覚も鋭敏だった。樹木との関わりにおいても，この二面が併存していた。（最近再び，植物にもごく微弱ながら感情と知性があるのではないか，という主張が現れてきている。）以下，宗教学的な樹木のとらえ方を簡単にまとめてみよう。

1. 1. まず一般的に，樹木は宇宙的な意味をもち，聖性と絶対的実在のシンボルとなる。樹齢をへた大木は堂々とそびえ，その幹は堅く，確固不動，決して揺らぐことがなく，この世を超えた崇高な存在と思われ，人に畏怖の念をよびおこすからである。こうして，多くの宗教で樹木は宇宙（コスモス）全体の像・ひな型，または神顕現の場，また世界の中心（へそ）である[8]。なお，それぞれの民族・部族，また時代によってさまざまな姿で現れる「宇宙樹」と「生命の木」とは，実際上，同じ性格をもち，区別されない。他の宗教的シンボル同様，宇宙樹にも多くの表象・象徴が帰せられ，またそれらが観念連合で結び合い（さらに樹木は当然，地や水のシンボリズムと，また蛇，石のそれとも，密接に関連し合っていて，分かちがたい），きわめて入り組んでいるが，およそ以下のように整理できると思う。

1. 1. 1. 宇宙軸（axis mundi）[9]

まっすぐにそびえ立つ大木は，天と地をつなぐものとして，世界の中心（軸）のシン

ボルになる。柱，棒，塔，山も，これと同じ意味をもつことがある。ゲルマン宗教の宇宙樹イグドラシルが名高い[10]が，その種の「聖樹」は多くの神話・伝説に見られる。樫(oak, Eiche. 樫と訳されることが多いが，樫は南の植物なので，実は楢か柏のことが多い[11])，オリーブ，カラマツその他，その地の代表的な木がこれになるのは当然であろう。日本の神社の「御神木」には何が多いであろうか。大杉，松，欅，樫，檜，楠(木宮神社)，梅，椎，などであろう。諏訪の御柱祭も同じ趣旨かもしれない。中でも興味深いのは「さかさまの木」の表象で，インド，イスラム世界にもあり，ユダヤのカバラからルネサンス以後の神秘主義に取り入れられ，宇宙生成の超越的根源が天にあることを表現している。天に根を張って，地上に伸びてくるのである。神道のさかき（榊，賢木。もともと「栄える木」の意[12]。現行のものはその枝葉）も，神性を宿す宇宙軸の縮小形である。

1. 1. 2. 生命と豊饒のシンボル

上述のような imago mundi（宇宙の像）は，たえず更新されて，永遠に続かなければならない。そのシンボルとして木はまことにふさわしい。木は，営々と生長し，時には何千年も生き，種子をたくさん生んで増え，常緑樹はすべてが死に絶える冬にも青々として生きており，落葉樹も，冬ごもりの後，春には生き返る。また，木の果実は多くの動物・人間を養う。水を出す木もある。炎暑の地方なら，木陰で生き返る思いがする。こうして，木は宇宙の再生と更新，豊饒（Fruchtbarkeit)，不死，すなわち生命のシンボルとなる[13]。生命の木の実を食べて不死を得るというモチーフは多くの神話・昔話に見られる。樹木神どうしの神聖なる結婚（hieros gamos）と，人間によるその模倣・再現の儀礼，時には性的放縦も，広く行われたようである[14]。旧約聖書の預言書でも，イスラエルの民がくりかえし異教の樹木神を崇拝し，淫行を重ねることが非難されている（イザヤ書1章29節，同17章10～11節，ホセア書4章12～13節，エゼキエル書8章14～17節，など）。

したがって，イニシエーション（成人儀礼）でも樹木（と他の植物）が使われた。子供として死んで，大人の人間に再生することが，樹木の種子と実の産出と一致するからである[15]。ヘラクレスが苦労の末，世界の果てでやっとヘスペリデスの園（神々の園）の生命の木（黄金のりんご）に到達するのも，イニシエーションの試練の一つであった。

木と人間の Miteinanderwuchs（誕生と成長を共にすること）の信仰もここに属するであろう。ここに表明されているのは，「呪術的に要求する人間の願いによって結ばれる神秘的結合」[16]である。このような信仰の名残りを伝える風習は現代日本にも残っている。女の子の誕生に際して桐の木を植えるのは，箪笥を作るという実用的な目的のためだけではあるまい。卒業記念植樹という習慣も，これから始まる新しい生をその木とともに歩んでいこうということで，呪術的な心情がかすかに残っているように思われる。

1. 1. 3. 元祖的イメージ

まず，ある民族または家族の祖先が樹木であるという信仰が，いくつかの文化に見ら

れる。(一種のトーテミズムと言えよう。)

次に，比喩として木のこのイメージが使われる。12世紀のフローリスのヨアキムはキリスト教の歴史を木に譬えた。旧約聖書イザヤ書11章のエッサイ（ダビデの父）の木はユダヤ人の歴史をあらわす。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで，その根からひとつの若枝が育つ」。言うまでもなく，キリスト教の解釈ではこの若枝はイエス・キリストである。

これの世俗化が系統樹であろう。われわれの多くがさまざまな種類の分類を考えるとき，この木のイメージに強く規定されている。動植物の分類，家系図，文化の伝播。これに反対し，ツリーでなくリゾーム（根茎）のモデルでシステム（つまりは世界と現実）をとらえようという新しい動きが思想界に出ている（ドゥルーズ／ガタリ)。

1. 1. 4. 古代・中世のゲルマン人の屋敷には「生命と守護の木（Lebens- und Schutzbaum)」が立っていた[17]。生命の木は家の住人の生命を守るものでもある。わが国の「鎮守の森」はもちろん，「御神木」もこのような意味をもっていると思われる。

1. 1. 5. 木の実（果実酒）や樹液の麻薬効果も，神聖なものであった[18]。代表的なのがディオニュソス（バッカス）神であろう。これとキリスト教の聖餐の宗教史的連関を主張する学説がある[19]。すでに旧約時代に偶像（特にタンムズ神）崇拝と葡萄酒はしばしば結びついていた（前にふれたホセア書の記事など)。神道にもお神酒がある。

1. 1. 6. 死

特殊な例だが，ヨーロッパイチイ（yew）は暗い外見と，毒をもつことのゆえに，古代ギリシアでは悲哀・死・下界のシンボルとされ，墓に植えられた。南ヨーロッパではこの木で作った十字架を魔よけとして首にかけたという[20]。「花の下にて春死なむ」や「櫻の樹の下には屍體が埋ってゐる」「人喰いの木」「首くくりの木・縛り首の木」（ギリシア神話から西部劇まで）といった表現が現代のわれわれに訴えるところがあるのも，同じ心情の系列に属するものと思われる。ゲルマン宗教では首吊りは神話的・祭儀的意味をもっていたらしい[21]。一般に宗教現象では生と死のように，対立するものが緊密に結びついて，一体のものとしてとらえられる（coincidentia oppositorum)。

1. 2. その変化

これまでの叙述にすでにあらわれていることであるが，自然認識はおおいに変化した。上に略述したような樹木観は，今はただ民俗的慣習，祭り，また美術や詩の中にのみ，木に対する特別の感情，あるいは比喩として，生きのびていると言ってよかろう。Osterzweige（復活祭の枝)，「五月の木」，「五月の枝」，May-pole など。わが国の門松も，「本来は降臨する年神の依代ではなかったかと考えられている」[22]が，今はそのような宗教的意味はきわめて希薄になっていると言ってよかろう。また，アルレッキーノのもつ棒も，ヘルメスの杖と同じく，起源をたどれば呪力の源泉たる生命の木に行きつく[23]。

この変化ないし衰退は，ヨーロッパでは，ヘレニズムの密儀宗教が樹木と植物，またその実を精神化したことに始まり，さらにこれに次いで，キリスト教神学がパンと葡萄酒（ともに木・植物の実からできる）をサクラメントの要素として完全に象徴化したことで決定的になった[24]。つまり，木・植物・穀物・葡萄酒そのものは神や精霊でもなく，また神を体現するものでもなくなったのである。（ただし，ローマ・カトリック教会のミサの実体変化の説は古い異教の残滓をとどめている，と言わざるをえない。）

キリスト教は樹木信仰（および泉への信仰）を打破しようとする[25]。特にピューリタンは樹木崇拝をサタン礼拝・偶像崇拝として排撃した[26]。じっさい，豊饒と生命力を高めるための民衆の異教的祭儀がしばしば性的放縦にいたることは前述した。打破・排撃にもかかわらず生きのびた崇拝は，上述のように民俗の風習として残り，そのある部分はマリア崇拝と結びついてカトリック教会に取り入れられた。

2. 神学的に

以下，主としてカール・バルト『教会教義学』(KD) Ⅲ／1に拠って論じる[27]。これは，D. ボンヘッファーの言い方をまねて言えば[28]，宗教史の歴史の中で筆者がこれまで植物に関して読んだ，最も意味深いものであると思われる。

2. 1. 地

創世記1章9～13節について。この祭司資料による創造物語の第三日の記事は，地と植物の創造を扱う。

地はもっぱら人間が生き，居住する場（Lebensraum. 158)として，人間のために，造られた。カオスすなわち過去が海（恐ろしい場所）の形で陸（地）から区別され，追放される。こうして，堅くて，人間が住むことのできる地が，神に欲せられたものとして，神の善意によって，実現する。地は，人間が生活できるように，乾いていて，しかも植物を生じる（sprossen. 159)。しかし地のこの豊饒（Fruchtbarkeit)の力は地の内在的な能力ではない。それはただ神の命令によって与えられた力であって，神のことばなしには地は不毛であった。しかし，「今や地自身が行動的な主体となって」(171)，草と木を生じる[29]。だから地の産出力は，神のことばに聴く服従の能力（potentia oboedentialis）以外ではない。(158ff.)

このような意味で，「地は生けるものの母となる」[30]。しかしこの聖書の理解の仕方は，地を神（地母神）とする見方とは反対のものである。

11節以下，第三日の第二のわざは，この人間の住む場所の，いわば装備を扱う。

2. 2. 植物

すなわち植物の創造である。植物が生命をもつ被造物の最初のものである。植物の規定は，もっぱら人間（および動物）の食物になるということにある。これが「歴史の前提，その物質的基礎」(170)である。生命が保証されてはじめて歴史がありうるからである。人間は，何を食べようかと思いわずらう必要がない（マタイ6章31節)。人間が

存在する前にすでに神がそれを備えたもうたのである。

しかし，それだけではない。「植物は，まず疑いなくそれ自身のためにも造られた。その過剰が，後に食物になるという目的に役立てられる」(160) のである。「植物は自己の尊厳と生きる権利をもつ」(170)。人間は，食物＝植物を必要とするから，全被造物のなかで最も乏しい存在である。人間の優越性はただ，動物・植物と違って，それらに代わって，感謝する能力をもつ，という点にだけ存する。人間の誇りは，ただ神のあわれみに存する。

植物は太陽の光を必要とする。太陽も（土・水とともに）植物の生存の条件である。しかし，神だけが光と生命の創造者である。だから太陽崇拝は不可能である。

地が植物を産し，植物は「種をもつ」(11, 12節) から，生が生を生み，これがいつまでも続く。こうして，植物の創造をもって，自然史が始まる ── 人間との恵みの契約の歴史の Abbild, Vorbild（写し，模像），またその基体として(172) 。すなわち，この日に草木に命じられ，約束されたと同じことが第六日には人間に命じられ，約束されるであろう ── 生めよ，ふえよ，地に満ちよ。いっそう具体的には，植物を生やす緑の大地は，乾燥した荒地と対をなして，将来のイスラエルの歴史をあらかじめ反映している。神は荒野でイスラエルを見いだす。イスラエルは荒地を通り，すなわち，乾いて生命のない，危険と無の場所を離れて，緑あふれる約束の地パレスチナに導かれる。「神はそれを見てよしとされた」(10, 12節)。地上の生命は，それ自身よいことであり，荒地を通って楽園に至ることは，いっそうよいことである。こうして，植物の存在は歴史の原像・予型・比喩である。

創造の第六日，人間が造られた日の記事に，草と木（の実）が人間（および動物）に食物として与えられた，という記述がある (29, 30節) 。創造の元来の秩序においては，人間は植物食だった。つまり人間は，動物を支配せよとの命令は受けたが，動物の生死を決する権利はなかった。元来の世界には破壊も死も，したがって殺生も，なかった。全き平和の世界だった。注意すべきことは，創造物語は歴史以前の世界のあり方，あるいは，神の元来の意思を記述する Sage（強いて訳せば，伝説）だということである。（創世記の記者は終末時の平和の回復をも考えに入れているであろう。）肉食つまり動物の殺生が許されるのは歴史時代，すなわち恵みの契約の秩序の下のことである。そこでは動物の犠牲が捧げられ，それはイエス・キリストの犠牲にまで連なる神学的意義をもつが，それは別の問題である。(233ff., 237ff.)

2. 3. 木

2. 3. 1. 創世記 1 章 9 ～13節

植物は草と木に分けられる。この区分もまた，動物と人間の尊厳の違いの比喩となっている。「草の規定は，（中略）滅びることである。これが動物との親和性である」(173)。しかし「木の規定は，まっすぐに立ち，実を結び，しっかり存続することで，この点，人間の規定との親和性を示す」(173)。木は万物の神讃美に唱和することができる。木は高さを特長とする。しかし，だからこそ，自分の規定に反したときは，切り倒され，

滅びる。マタイ21章19節のいちじくの木，ヨエル書1章12節の葡萄・いちじく・ざくろ・やし・りんごの木は枯れ，エゼキエル書21章3節のネゲブの森は焼かれ，マタイ3章10節の良い実を結ばない木は斧で切られる。草にはそのような栄光はなく，したがって罪責を問われることもない。旧新約聖書には，個人，民衆，国民を草や木に譬える例が多数見いだされる。

2.3.2. 創世記2章

ヤーウェ資料の創造物語は祭司資料のそれとは大いに趣を異にしている。舞台となっているエデンの園や，そこを源流として流れ出す川の地理的記述に見られるように，独特の現実性をもつと同時に，高度の象徴性を帯びている。木についても同様である。

エデンの園は「強調をこめて果樹園（Baumgarten）として，『聖なる杜』として，描かれている」(288f.)[31]。したがって最初の人間は庭師（園丁）である。園はまた聖所の原像，時間的な安息日に対応する空間的な聖所の祖型であり，人間の仕事は週日の苦役ではなく，安息日の活動である。聖所はしるし・サクラメントの性格をもつので，エデンの園でなされた約束と啓示は後の歴史の中で，また歴史の終わりに，繰り返されるであろう。

この記事では，第1章とは違って，水はカオス・無として恐ろしいものであるのではなく，祝福である。すなわち，水が「土地の全面を潤して」(6節）おり，また地のすべての川はエデンに源を発する(10〜14節)。ここでは，生命，植生，豊饒を可能にする，水の肯定的性格がとらえられている。水も祝福のしるしなのである。(289f.)

エデンの園に多数生えている木も，しるしの性格をもつ。ここの木が，あらゆる樹木（さらに ── ここには草はない ── あらゆる植物）の原型である。しかし木のイデアというのではない(288)。創世記の記者は，本来の地の上のどこかに存在した，現実のエデンの園の木について語っているのである[32]。

園の中央が至聖所であり，それが二本の木である。

2.3.3. エデンの園の生命の木（創世記2・3章）

2.3.3.1. 生命の木

ここに出てくる二本の木はシュメールの宗教にさかのぼる[33]。「たしかに宗教史上，生命，若返り，不死をもたらす奇跡的な秘薬の表象は多い。しかし創世記のこの箇所はまさに，そのような秘薬など存在しない，と言っているのだ」(323)。では，ここの生命の木はどういうものか。

この二本の木にはたしかに謎めいたところがある。特に生命の木は余分であるとさえ見える[34]。この木から食べることは誘惑ではないのだから。人間はこの木から食べることを禁止されていなかったが，また食べる必要もなかった。神と人間の関係が本来の正常な状況にあるとき，この木から食べることが禁止される必要はない。死への恐れも，生への渇きも，人間の本来の規定にはないのだから。人間がこの規定に背くという「異常な状況」(323）が実現してしまった後，はじめて，この木の実を食べたい，永遠に生

きたいという欲望が出現する。しかし事実としては，罪を犯したアダムとエヴァはこの木の実を食べなかった。もし食べたとしたら？　人間は神の現実にじかに手をのばしただろう。いわば神になっただろう。永遠の生命を得ただろう（3章22節）。しかし，その場合の永遠の生命とは，人間自身のUnheil（災い）の神化，永遠の死である永遠の生命，復活なき死であるほかない。事実としては，幸いにも人間はこの恐るべき危険から守られた――この木から恵みによって遠ざけられることによって。堕罪後の異常な状況では，死んでよいということが（そして復活が），唯一のHeil（救い）になるのである。(291f., 321ff.)

園の中央は至聖所，すなわち神の座である。そこにある二本の木は，創造者が人間の近くに現在することを示すしるしである。生命の木は，こうして，生のしるしである。神の善意，人間が生きてよい生のしるしであり，故郷のしるしである。後の荒野のイスラエルにとっては幕屋の契約の箱，カナンの地にあってはエルサレムの神殿が，同じしるしとなる。世のはじめから，生命の福音があったのである。(292, 322)

生命の木が福音の，善悪を知る木が律法の，予型である。神の一つの恵みが，いわば二つの要素に分解されて表されている(312)。創世記本文（また聖書の他の関係箇所）を読んで，二本の木が一本の木であるように感じられるのは，このためである。創世記3章以後，この二つは分離してしまい，イスラエルの民との契約の歴史が，福音と律法の弁証法として進行する。この意味でパラダイスの物語は歴史の反映であるが，それを超えて，福音と律法が再び一つになる，いわば二本の木が一本になる一点を指し示している。この統一点はイスラエルの歴史のかなたにある。すなわち，イエス・キリストである。(314f.)

2.3.3.2.　善悪を知る木

善悪を知る知恵の木は人間に示された可能性のしるしである。善悪を知るとは，区別する能力のことである。あるべきものと，あらざるべきものとの間の審判者たることであり，しかりと否，救いと滅び，生と死の間を区別できるということであり[35]，つまり，神のようであるということである。この能力は，被造物の主，創造者だけのものだからである。注目すべきことに，神自身がこの可能性を人間に示した。この木からは食べてはならぬ，という禁止の形で。神はこの可能性が実現しないことを望んだ。これは神の，父としての配慮である。人間はこの木から食べれば死ぬ必然の下にある。神は人間の生存の危険を知りたもうので，自分が造ったものを守ろうとされる。だからこの禁止は，最初の力強い約束であり，神はこれをもって死に立ち向かう。生命の木の意味は，人間は神の意思に従って生きてよい，ということであった。ここに，二本の木の密接な関係があらわれている。ここで，神のこの禁止が恵みにほかならないということに疑いをさしはさみ，それは神の人間に対する妬み，つまり悪意ではないか，と問いかけるのが蛇である。(292ff.)

ここで二つの問いが起こるであろう。一つめは，「食べたら死なねばならぬ」という脅しは神にふさわしくないのではないか，というものである。――答え。善悪を知る知

は神だけのものである。創造者だけが，創造しなかったもの，斥けたものについても，知る。人間はこの審判者の創造と非創造の区別を承認し，創造と生の，つまり肯定的な領域で生きるのが，人間の本来の規定であった。ところが人間は，いわばわき見をして，不可能な可能性をとらえてしまう。善だけでなく悪をも，神に欲せられたものだけでなく，神に斥けられたものをも，知ろうとする。肯定だけで満足せず，否定についても，神の怒りの不可知の深みまで，知ろうとする。しかも自分の力で。人間は「神のよう」になろうとする。こうして人間は神の責任をみずから担わなければならなくなる。善と悪，救いと滅び，生と死を自分で区別し，自分で選び，斥けねばならなくなる。しかもそれは絶対的・全体的な知識でなければならぬ。これは人間には重すぎる責任である。神の位置に立つということは，神以外のものには，致命的な毒になる。だから神はこの危険を予防しようとして，禁止と脅しを人間に語られた。神にふさわしい，父としての愛から出た配慮だったのである。(295ff.)

二つめの問いは，なぜその保護は禁止の形をとったか，食べる可能性を閉じてしまった方がよかったのではないか，ということであろう。── 答え。この問いは自由への問いである。神から贈られた生は，善悪を知る木の前で，課題（Aufgabe）の性格を得る。すなわち，人間は神が審判者であることを承認し，感謝と服従の決断の中で生きなければならない。しかし，服従が物理的な強制・必然だったとしたら，それは真の服従ではない。人間には Spielraum（活動の余地）が与えられた。ここに自由がある。人間に本来与えられ，求められる自由は，ただ善にのみ，服従にのみ向かう自由である。自由は神に試される試験ではない。試験は正当化された不信の行為であるが，神はそのような悪意をもたない。本来の神と人間の関係は否定の要素をいささかも含まず，純粋に善と肯定の世界であった。だから自由は服従か反抗か，どちらを取るか，という選択の自由ではない。服従の可能性が唯一の可能性（die Möglichkeit）だったのであって，反抗の可能性は，本来なかった。神はこのような自由を人間に贈ることによって，いわば自由な者どうしの交わり（主人と奴隷の支配関係でなく）を求めた。そのために神は人間を創造されたのであって，この自由が神と人間の間の tertium comparationis (302) である。もし神がこの自由を人間に与えなかったとしたら，それは決して善意の行為ではなく，いっそう小さな愛ということになって，神の本性に反する。神は完全な愛なのだから。だから神が人間に完全な自由を付与しないことは不可能であった。そして，人間が自由を悪用するとしたら，その責任は神にはない。── こういうわけで，人間の我意で善悪を知ることは，神のようになることであるが，それは破滅にいたる（verderbliche Gottähnlichkeit)。(299ff.)

善悪を知る木が律法の予型であることは前に述べた。それは後に十戒に代表される，神の戒めとしてイスラエルの歴史の中で具体化する。戒めは多くの禁止を含むが，その積極的な意味は，人間が自分で自分を選び，高め，義認することなしに，神の恵みに満足すること，神の道，神の裁きを知ろうとすることなしに，神が与えてくれた善の地盤の上で生きることである。(308)。── 福音の目的と律法の目的は一致する，ちょうど二本の木が同じ一つの恵みの二面を示すように。

生命の木と違って「善悪を知る木は，旧約聖書にも一般宗教史にも類例がない」(325)[36]。そこでこの木の意味をめぐって多くの解釈の試みがなされた。近代的なものとしては，学問・文化・進歩，また性の別の発見，といった解釈もある。われわれの理解は上に述べたとおりである。善悪を知る知は正しい統治者，審判者の知である。この能力がふさわしいのは，厳密には神のみである。生命の源である者だけが，善悪を知るからである。(325ff.)

「神がよいものとされたものが善であり，神が悪とされたものが悪である。それ自体善とか悪とかいうものはなく，また人間がよい・悪いと思うものが善・悪なのでもない」(328)。存在についての神の知を不当に要求するのが呪術的知である。だから，創世記の続く記事には「呪術的動物の典型たる蛇」(329) が登場することになる。

以上，かなり詳しくバルトの解釈を紹介したが，聖書がとらえる知は，一般に哲学や科学，また常識の考える知識とはかけ離れていることがわかる。プロメテウス的な，あくなき知識欲の Hybris とは対極にある考え方である。「主をおそれることが知識の始めである」(箴言1章7節)。知ることの抑制としての知，それ以上に，一種の不可知論である。ソクラテスの「無知の知」ときわめて近似した見方である。しかし，それが「純粋否定性のイロニー」[37] であるのに対し，聖書は絶対的な知を創造者のもとに措定する。だから人間の知のあり方は，「しかり，しかり，否，否，」にとどまるべきで，「それ以上のことは，悪い者から出るので」あり，したがって「誓ってはならない」(マタイ6章33～37節)，むしろ，誓うことは不可能なのである。

このように，創世記2・3章では植物としての木より，それが指し示す生命と善悪の知識が主題となっていることが明らかである。しかし，この二本の木が，聖書で最も重要な木なのである。善悪を知る木が何の木かと問い，リンゴと推測する，などというのは，見当外れである。

なお，ボンヘッファーの釈義[38] も，オリジナルなものであるが，ほぼ同じ線に沿っている。

2.3.4. ヨハネ黙示録の生命の木

2章7節「勝利を得る者には，神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。」(訳文は新共同訳聖書による。)

22章1～6節は新しい天上のエルサレムのヴィジョンであり，それは失われた楽園の再来にほかならない。2節「川は，都の大通りの中央を流れ，その両岸には命の木があって，年に十二回実を結び，毎月実をみのらせる。そして，その木の葉は諸国の民の病を治す。」ここの描写はおそらくエゼキエル書47章7，12節を手本にしていると思われ，木は複数である[39]。それらは川の命の水（1節）を吸って，パラダイスにふさわしく，年に12回も実を結ぶ。

ここではすでに善悪を知る木は言及されない。一対の，あるいは双子の，さらに言えば，もともと一本の木の二面だったものが，ここでは統一され，本来の一体性を最終的に回復したからである。すなわち，福音と律法の分裂が克服された，というよりも，律

法は不要になった。神が近く現臨し，「神の僕たちは神を礼拝し，御顔を仰ぎ見る」(22章4～5節）この場所では，すべてが恵みと生命だからである。また，小羊キリストが玉座にあって親しく統治するという点からも，善悪を知る木は不要になる。

こことエデンの園とでは生命の木が役割を変えている（本質は変わっていない）と思われる。創世記2章では生命の木は（神の恵みのしるしとして）いわばただ黙って立っているだけで，18節にその名が言われているだけだった。3章，人間が罪を知った後，はじめてその木の実が人間に食べられる可能性について言及された。この可能性の実現は人間の永遠の死になるであろうということは，すでに述べた。今，ここ天上のエルサレムでは，それには何の危険もない。「もはや死はない」(21章4節）からである。永遠の生命はすでに実現しているのだから，生命の木から食べる必要はない。しかも同時に，もはや誘惑する悪い蛇も滅ぼされ，罪の可能性も根絶されているのだから，その実を食べても差し支えない。このような，いわば高次の自由の弁証法は，エデンの園のアダムがもっていた自由と同じものである。ただ，悪や無の影の一片ももう差さない世界に住むここの市民は，キリストの兄弟として，アダム以上の完全な自由をもつ，と言えよう。

生命の木が多数あるということも，この点から理解されるであろう。エデンの園では，しるしであるから，一本でなければならなかった。ここ天上のエルサレムでは，現実の（あえて言えば，日常的な）木であるから，たくさん生えている。創世記記者の位置から見てエデンの園の木が現在および未来に対する約束であったのに対し，黙示録の著者の視点からは生命の木は実現した約束なのである。この点．エゼキエル書47章も同じ光景を見ていると思われる。

2.3.5. 芥子種の譬え

マルコ福音書4章30～32節（マタイ13章31～32節，ルカ13章18～19節に平行記事)。この記事は，実際のことと取ると，いろいろおかしいところが多い。ふつう芥子と言われるのはカラシナで，アブラナ科の越年草のことである。「木」とされているのは変である。大きなStaude（多年生草本）のことであろうか。これは肥沃な土地では4mにもなる（Sinapis nigra)。あるいは芥子の木（Salvadora pasica）のことかもしれない。これは珍しい種類であるが，死海・ガリラヤ湖畔にあり，9mにも達するという[40]。クロガラシ（Brassica nigra Koch）だとすれば，「肥えた土地に栽培すると4mにも達し」，「見上げるような大きさとなり，鳥が実を求めて訪れる」[41]。植物学的には芥子粒は最小ではないし，またその「木」も樹木中，最大のものではない。さらに，芥子粒を「畑に蒔く」というのもおかしい[42]（しかも，たった一粒！[43]）し，鳥が枝に巣をつくるのも事実ではない。芥子粒の小ささはパレスティナの諺になっているぐらい，親しいものであった[44]。もっとも庭で芥子を栽培することは禁止されていたので，他国の諺が入ってきたのであろう[45]。

しかしこの記事は譬え話であって，言いたいポイントは明らかである。芥子種が一番小さいというのも，イエスの弟子が「最も小さな者」であることを想起させるという意

味であろうし，枝葉を広げた大木になるということは，ダニエル書などに描写された宇宙樹を想起させる意図であろう。神の国がそれと同じようにあらゆる国々をおおう，というのである。シュヴァイツァーによれば，この譬え話は神の国の成長の特質を表している。すなわち，その初めの小ささと結果の予想しなかった大きさとの際立った対照，それを見る驚き，そこにうかがわれる（神による）秘められた活動。だから信徒は，現在の時にあって，確信と希望をもって神の国の完成を待つべきである（なお，ダニエル書4章18節，エゼキエル書31章6節からの引用は，教会にユダヤ人だけでなく，すべての民族が集められることを示す）[46]。ローマイヤーによれば，日常的でごくありふれた芥子の胚芽から，奇跡的な，人間には理解できないことが起きる。しかしそれはユダヤ人が待望しているように，突然実現するというものではなく，有機的に，目につかない法則性をもって成長し，始まりと経過と完成という時間性を備えている。それが，神の国の奇跡，老いたアブラハムに子が授かったと同じ奇跡なのである[47]。

バルトはKDの「人の子の帰還（いわゆる高挙）」の項で，「この人間〔イエス〕の中でオリジナルに起こった下から上への運動…は神の恵みへの答えとして生起する。その運動はマタイ13章31節以下によれば，地に蒔かれた芥子種から芽を出して天に向かって成長する木である」[48]という譬えを語っている。また「教会の成長」の項では，「神の国は，そもそも歴史をもつとすれば，歴史の中に実存する教会において，自己の歴史をもつ」[49]と，芥子種の譬えを解釈する。さらに「希望における生」の項で，「眠りこけている教会と人類に代わって目覚めていて，折りにふれて彼らに注意をうながす」見張りとしての生とならんで，「キリスト者の希望における生は，現在の世にすでに埋められた永遠の種子，あるいはむしろ，全世界の来たるべき救いの種子」であり，いつか大きな木になることを，同じ譬えを引いて述べている[50]。この三箇所はそれぞれ，神の国の三側面，キリスト・教会・個人としての信徒に対応している。

3. キリスト教の樹木観と民俗信仰との融合

3.1. 旧約聖書

エゼキエル書31章，ダニエル書4章7～9節（17～20節がその夢の解きあかし）の大木は，宗教学的にみれば明らかに，宇宙的構造をあらわす宇宙樹である。神学的にみれば，エジプトの王パロとバビロンの王ネブカドネザルがそれぞれ大木に比べられ，その栄光はその大きさであり，その卑賤は，おごり高ぶって根もとから切り倒されること，ということである（本稿2.3.1.参照）。エゼキエル書17章24節，「そのとき，野のすべての木々は，主であるわたしが，高い木を低くし，低い木を高くし，また生き生きとした木を枯らし，枯れた木を茂らせることを知るようになる。主であるわたしがこれを語り，実行する」[51]が示すように，大きな木に譬えられる強大な権力をも打ち倒す，神の力ある活動が表現されている（KD Ⅲ／3, S. 162参照）。

列王記上7章15節，ソロモンの神殿の二本の青銅の柱は，シュメールの神殿の二本の木をあらわしているのかもしれない[52]。他に類例がいくつかある。

3. 2. 新約聖書ヨハネ福音書15章のイエスの言葉「わたしはまことのぶどうの木」には生命の木の表象がひそんでいるかもしれない[53]。「この譬えに最も明らかに類似している例はグノーシスやマンダ教の伝承に見いだされる。そこでは同じくぶどうの木が生命の木であり，魂（信徒）たちがその枝・蔓なのである」[54]。

3. 3. 十字架[55]

十字架が生命の木から作られた[56]という俗信は古代教会の早い時期に成立したようである。なおその前提には，アダムの創造とパラダイスの木をメシア待望に結びつけた古代ユダヤの伝承（カバラ思想は生命の木を創造の中心とした）がある[57]。逆に，十字架がキリストの血によって生命を与えられ，芽をふき，葉が生え，実をつける，という信仰も中世に成立した[58]。どちらの場合も，生命であるキリスト，その死と復活の場，樹木の生命力への太古からの信仰，こういったものが民衆の考えの中で一つになったのであろう。

十字架はまた宇宙軸のシンボルともされた。丘の上に高くそびえ，天と地を結ぶというイメージであろう。

3. 4. カトリック教会のしゅろの日曜日に用いられるしゅろとオリーブの枝[59]，またクリスマスツリー[60]は，明らかに古いゲルマンの信仰の名残りである。中世のキリスト教では古代ゲルマンの樹木の聖所が聖母マリアと結びついた[61]。その他，類例は多い。これらは中世教会と民衆の俗信との妥協の結果である。

近代のカトリック・モデルニストの一人ジョージ・ティレルは，世界の諸宗教すべてにカトリック教会の神の啓示を見て，それを「人類の隠された諸根源からわれわれの血管に流れ入って沸き立つ，大いなる生命の木の樹液」と譬えている[62]。これも，譬えにすぎないけれども，きわめてカトリック的な考えで，プロテスタントからすると，生命の木を聖書のそれとしてでなく，異教のそれにすり替えてとらえているから，このような比喩が出てくるのではないか，と勘ぐりたくなるところである。

4. 結論

1. に略述したように，宗教学的には木はさまざまな意義をこめて受け取られている。全体をとおして，樹木は聖なるもの，神，精霊の顕現である。樹木をめぐる宗教的・民俗的表象は無数にある。人々は木とともに，それに頼って，生活していた[63]。キリスト教はこれを偶像崇拝として排撃した。今から見るとかなり強引に，樹木神を悪霊，時にはサタンであると決めつけて闘った。実際には，教会がこの闘いに一応（というのは，妥協も行われたからであるが）勝利をおさめて，ゲルマン人の精神を本質的に変える（そのさい，キリスト教の方も一定程度ゲルマン化した）までには千年以上かかった。ヨーロッパに関しては，樹木観はここで一回だけ，決定的な転換を経験した。神学の立場からは，教会のこの態度決定は当然である。この問題は，結局，神学から見た宗教それ自身の問題になる。

神学的に言えば，身の回りにありふれたものでも，創造論的に見ると，十全の意味と位置づけをもつ，ということである。樹木・植物以外のものも，同様である。例えば，天，地，太陽，星，動物，時間，空間，その他すべて。そして，人間自身。男にとっての女。すべて，被造物として，脱神化が徹底している。（その分，アニミズム的な山川草木との親しさといった感情からは遠い。この点，アッシジの聖フランチェスコは幾分危険な ── 異教的 ── 場所に近づきすぎているように思われる。）キリスト教のこの性格がヨーロッパ近代自然科学成立の重要な前提の一つになったことは疑いないであろう。簡単にふれておけば，ギリシア思想と違って，物質・肉体を重視する思想，自然が被造物であり，神性をもたないから，距離をもって，遠慮なく自然を扱えるという世俗性，創造神に造られたのだから，自然は法則性・統一性・確実性・無謬性をもつという信念，こういった条件は，多かれ少なかれキリスト教から出ている[64]。

まず，樹木を含めて万物がそれ自身で，存在意義をもつ。神によって造られ，しかもよいものとされているから，というだけの理由で。

そこではとりわけ，目的論的意味づけが顕著である。天地万物は人間の生存のため，ひいては神と人間の契約の歴史の舞台となるため，その条件また前提として，ある。これは明らかに自然科学とは違う見方である。しかし，どちらが現実的であろうか。聖書の目的論はきわめてnüchtern（理性的）で，同時代の他の神話と著しく異なる。この点，むしろ近代科学と同じである。しかし，明確さの点では，科学より上ではなかろうか。科学は現象を取り扱う[65]。しかし科学は，事物の存在論的意味づけ・位置づけを完全・確実に遂行することはできない。科学は永久に相対的前進にとどまる。さらに，科学が現象を選び，捨て，分類し，評価する基準は何か。自覚された，または自覚されざる哲学的前提であるか。しかしそれは確実であろうか。筆者には，ここには神学的前提が不可欠であると思える。現在の科学も，忘れられがちであるが，神学的前提の上に発展してきたから，根本的に健全なのである。

本筋にもどって次に，樹木を初めとして被造物は比喩・反映・原型としての意味をもつ。聖書，ことに創世記は，樹木それ自身に目を注ぎ，よきものとして肯定しながらも，決定的な関心はあくまでも神と人間（イスラエルの民から人類へ）にある。上に述べた目的論と同じ根本関心がここにも表れている。さらにしかし，それは人間中心主義とは違う，ということが注意されなければならない。人間は，例えば植物に対して，絶対の支配権をもつのではなく，いわば自然界の管理人にすぎず，絶対の主権者はあくまでも神なのである[66]。これは現代のエコロジー問題を考えるさいの出発点となる思想であると思う。

以上をまとめて，樹木および他の被造物は，創造に始まる契約の歴史（救済史）の中に確固として位置を占める，ということである。

注

1）阿部謹也の諸著参照。
2）梅原猛「百人一語」72，朝日新聞1992年3月23日朝刊。
3）平凡社大百科事典「木」の項，若桑みどり，による。
4）Das Alte Testament Deutsch (ATD) 14／15 Psalmen, 7. Aufl. 1966, von A. Weiser , S. 71.
5）AoO. S, 72.
6）AaO. S.421. なおエレミア書17章5～11節の詩が詩篇1篇に極めて類似する。
7）W. F. オットー『神話と宗教』辻村誠三訳，筑摩叢書，1966，参照。
8）Die Religion in Geschichte und Gegenwart (RGG), 3. Aufl. Art. Weltenbaum, von C.-M. Edsman.
9）以下，1. 3. までの3区分は，前掲の平凡社大百科事典「木」による。
10）詳しくはFr. Heiler, Die Religionen der Menschheit, Reclam, 3. Aufl. 1980, S. 350 参照。
11）H. ジャンメール『ディオニューソス』言叢社，1991，の訳者小林真紀子氏のご教示による。
12）大辞林（三省堂）による。
13）RGG, Art. Lebensbaum, von M. Eliade. 多くの実例を含む，より詳細な記述はエリアーデ著作集2『豊饒と再生　宗教学概論2』久米博訳，せりか書房，1978，第八章に見られる。また，宇宙樹の研究方法についての考察が，同6『悪魔と両性具有』宮治昭訳，1973，268頁以下にある。
14）フレイザー『金枝篇』(一) 永橋卓介訳，岩波文庫，263頁，286頁以下，294頁以下。逆に性的禁欲によって（生命力を集中して）植物の成育を促進しようとすることもあった。同書292頁以下。
15）RGG, Art. Bäume u. Pflanzen, von F. R. Lehmann.
16）G. van der Leeuw, Phänomenologie der Religion, J. C. B. Mohr, 4. Aufl. 1977, S. 44. フレイザーなら「共感呪術」というであろう。
17）Fr. Heiler, Erscheinungsformen und Wesen der Religion, Kohlhammer, 2. Aufl. 1979, S. 67.
18）RGG, Art. Bäume u. Pflanzen.
19）前掲『ディオニューソス』663頁以下。
20）平凡社大百科事典「イチイ」の項，谷口幸男，による。
21）阿部謹也『ヨーロッパ中世の宇宙観』講談社学術文庫,1991，132頁以下。
22）平凡社大百科事典「門松」の項，田中宣一，による。
23）山口昌男『道化の民俗学』筑摩書房，1985，112頁。
24）RGG, Art. Bäume u. Pflanzen.
25）阿部謹也，前掲書 247頁。
26）フレイザー『金枝篇』(一) 263頁。もちろんこのような努力は，バアルやイシュタルを排してヤーウェのみを唯一の神とした旧約聖書の預言者から始まっている。
27）Karl Barth, Die Kirchliche Dogmatik Ⅲ／1, EVZ-Verlag, 1970. 以下，本書からの引用・要約は本文の（　）内にそのページ数を記す。
28）D. Bonhoeffer, Schöpfung und Fall/Versuchung, Chr. Kaiser Verlag, 1968, S. 68.
29）「ここでは，よく考えた上で，神と植物の間に存する間接性の関係が，表現されているのである。植物の生命そのものは，地と地の創造力と，直接の関係を有する。」ATD 2／4, Genesis, 9. Aufl. 1972, von G. v. Rad, S. 35.
30）Bonhoeffer, op. cit. S. 37.
31）ATD, Genesis, S. 53f. も同様。なお「ここには，ヤーウェが立派な公園の所有者である，という前代の見解がまだほの見える。」Ebd.

32) 「現実」の理解については，拙論「神学的現実」本紀要第36輯（1990）参照。
33) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 71.
34) Bonhoeffer, op. cit. S. 106 も言う。「物語全体は最終的にこの箇所〔3章22～24節〕をめざしている。これまで奇妙なことにほとんど語られなかった生命の木の真の意味が，ここではじめて理解される。それどころか，物語の全体がまさにこの木をめぐって展開していたことが，明らかになる。」フォン・ラートによっても，「生命の木については，ほかには僅かに箴言に出てくるだけであるが，そこでも色あせた比喩的な表現になっている（箴言11章30節，13章12節，15章4節)。」ATD, Genesis, S. 54.
35) 「善と悪ということは，この文脈では，förderlich, heilsam — hinderlich, schädlich の意味に理解した方がいいかもしれない。」ATD, Genesis, S. 63.
36) ATD, Genesis, S. 54 にも同趣旨の指摘がある。ただしエリアーデによれば，バビロニアには，真理の木と生命の木という一対の木が天空の東の入口に立っている，という伝承がある（前掲『豊饒と再生』207頁)。ほかには類例がないようである。
37) キルケゴール『イロニーの概念』のテーマ。
38) Bonhoeffer, op. cit.
39) Das Neue Testament Deutsch (NTD) 11, Offenbarung, von E. Lohse, 9. Aufl. 1966, S. 107. ブセットの注解によれば，生命の木は無数である。Meyers Kommentar, Offenbarung, von W. Bousset, 6. Aufl. 1906 (1966), S. 453.
40) Meyers Kommentar, Mt-Ev., von E. Lohmeyer, 4. Aufl. 1967, S. 216.
41) 大槻虎男『聖書の植物』教文館，1977，164頁以下。なお，「カラシナの類で聖地に自生するのは，シロガラシ (Sinapis alba.) とノハラカラシ (Sinapis arvensis L.) である（同所)。
42) Meyers Kommentar, Mt-Ev., S. 217f.
43) NTD 2, Mt-Ev., von E. Schweizer, 13. Aufl. 1973, S. 199. なお，「神の永遠の植えつけ」という観念はクムラン教団にもある。Ebd.
44) NTD 1, Mk-Ev., von E. Schweizer, 12. Aufl. 1968, S. 57f.
45) NTD 3, Lk-Ev., von K. H. Rengstorf, 14. Aufl. 1969, S. 171f.
46) NTD, Mk-Ev. S. 58. ダニエル書4章，エゼキエル書17章23節では「鳥を宿す木は，大帝国が属国に政治的保護を提供する象徴」であった（C. H. ドッド『神の国の譬』室野・木下訳，日本基督教団出版部，1964，252頁）が，今は「神の支配が…遠くの異邦人をその広がりの中に包含するよう定められている」（A. M. ハンター『イエスの譬・その解釈』高柳・川島訳，同，1962，65頁，76頁注3）ことである。
47) Meyers Kommentar, Mt.-Ev., S. 217ff.
48) KD Ⅳ／2，S. 50.
49) KD Ⅳ／2，S. 729.
50) KD Ⅳ／3，S. 1072.
51) 訳文は新共同訳。
52) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 69.
53) van der Leeuw, op. cit. S. 45, Anm. 1.
54) NTD 4, Joh-Ev., von S. Schulz, 12. Aufl. 1972, S. 194.
55) RGG, Art. Lebensbaum，エリアーデ『豊饒と再生』214頁以下参照。
56) エリアーデ前掲書，215頁。Heiler, Erscheinungsformen..., S. 71f. 参照。
57) RGG, Art. Lebensbaum.
58) 柳宗玄他編『キリスト教美術図典』吉川弘文館，1990，136頁。
59) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 68.
60) C. ルパニョール『サンタクロースとクリスマス』今井・加藤訳，東京書籍，1983，69頁以下。
61) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 70. また植田重雄『聖母マリア』岩波新書，1987，16頁以下，石井美樹子『聖母マリアの謎』白水社，1988，特に176頁以下，参照。
62) Heiler, Religionen..., S. 466 に引用されている。

63) ほぼ同じことが木の集まりである森についても言える。聖所（Heiligtum）を表すインド・ヨーロッパ諸語の多くは，森（杜）を崇拝する祭儀と関連している（RGG, Art. Haine, von J. de Vries)。ただし森は，その暗さと奥の知れぬ不気味さのゆえに，悪霊の支配する場所として恐れられる面が，木の場合より強いようである。

64) Vgl. RGG, Art. Naturwissenschaft Ⅲ, von G. Süβmann, E. ブルンナー『キリスト教と文明の諸問題』川田殖他訳，新教出版社，1982，53頁以下，岩波講座『新哲学』5「自然とコスモス」所載の諸論文，村上陽一郎の諸著，参照。

65) これに関しては前掲拙論「神学的現実」で短く論じた。

66) これに関しては本紀要本号の拙論「蛇について」で論じた。